

1. 大洪水被害への支援活動に関するご報告

22名（内学校法人1）に及び方々から義援金153,000円を頂きました。紙面をお借りして厚く御礼申し上げます。33,000円は真珠日本語センターに關係する被害者生徒への文房具贈呈に当てました。

60,000円は、ケーゴール県において増水による地滑りの被害にあったインド・タミル人の家族に、日常生活必需品を買って提供しました。すべて大岩が現地において、物品の購買を確認し、真珠日本語センターのカーンチャナー校長、スバ・ランカ協会スリランカ事務所長のインドラナンダ和尚と和尚の寺でタミル語を教えているインドタミル人の先生、バーヌマティさんの協力を得て贈呈してきました。こんなに多額の義援金を頂くことができ、被害にあった多くの子供たち、家族を助けることができました。現地のみなとともに、心から感謝しています。なお、残りの60,000円は、インド・タミルの生徒たちに、上級学校への進学を動機づけるためのワークショップに使わせていただきます。この活動に関しましては、次の2の（2）でも言及します。



インド・タミル人の住居：長屋

買ったたりもらったりした支援物資　　バーヌマティさんとお母さん　狭い所に10家族が住む住環境
※バーヌマティさんは被害にあったインド・タミル人とは親戚・友人関係にあり、誰が何を必要としているかよく理解していました。

2. ツアーでの出来事

7月23日から8月1日までスリランカ・ボランティア親善ツアーに行ってきました。16名の方々が参加されました。ツアー中に、思いもかけないサプライズがありました。その一つは、テレビ局の取材を受けたことと1994年から2005年まで大統領を務めたチャンドリカ・バンドラナイケ・クマラトウンガ夫人とお会いしたことです。

(1) ゴム園のインド・タミル小学校における崖修復事業の記念式典

7月29日に、5年ほど前から文房具の贈呈などで支援してきたゴム園のインド・タミル小学校において崩れかかった崖にコンクリートを打ち付け、防護壁を建設しました。これは「公益財団公益推進協会夢屋基金」から頂いた助成金で建設されたものですが、当の小学校を管轄する教育委員会の委員長やディレクター、そして保護者を招いて記念式典が行われました。先のインドラナンダ和尚さんも参加され、私たちも招かれました。この式典をシラサというテレビ局が取材に来ていたのです。そしてその模様は当日の夜10時のシラサ・ニュースで取り上げられました。驚きでした。私も取材を受けましたが、放映されたのはインドラナンダ和尚のインタビューと式典の様子であり、私の映像はカットされていたそうです。まあそんなものなのでしょうね。和尚の話ですと、元大統領チャンドリカ夫人がシラサの幹部に取材するように推薦したからだとのこと。どうして？と思いますよね。この点は次の（2）を読んでもいただければ納得されるでしょう。



(2) スリランカの元大統領チャンドリカ・バンダラナイケ・クマーラトゥング夫人との出会い

元大統領チャンドリカ夫人が私たちを自宅（ワラウワと呼ばれる大邸宅）に招いてくれたのです。それは彼女がスバ・ランカ協会のインド・タミル人小学校への支援活動に興味を持ってくれたからです。

このインド・タミル人はイギリス植民地時代支の19世紀初頭に南インドから出稼ぎにきた人々の子孫であり、スリランカにおいて低賃金で働く紅茶園・ゴム農園の労働者です。13世紀に島の北部に王国を築いたタミル人の子孫とは区別して、インド・タミルと呼ばれています。彼らは日々の暮らしに追われ、子供の教育など二の次にせざるを得ない人たちです。周囲のシンハラ人ともほとんど交流がありません。こんな状況を少しでも改められたらと考えました。

インド・タミルの中でも数は極めて少ないのですが、小学校を出て、中学・高校に進学し、社会的に評価される職業についている人たちもいます。私たちは、このように成功したインド・タミルの「先輩」を招き、どのように勉強をし、いかに努力して成功したかという体験談を話してもらうワークショップを開催しました（2016年4月1日）。いわゆる「ようこそ先輩」企画です。このときに、インド・タミルの児童だけでなく近隣のシンハラ人の学校の生徒も30人ほど招きました。これを機にインド・タミルとシンハラの子供たちの交流を図り、いかにインド・タミルの人たちが厳しい環境で生活しているかを理解してもらう一助になればと思ったためです。この企画はさらに進展し、シンハラ・タミル新年（4月13日～17日）に、インド・タミルとシンハラの子供たちが一堂に会して、ともに新年のリクリエーションを楽しむというイベント実現につながりました。

これをチャンドリカ夫人は大いに評価してくれたのです。というのも、夫人は、多民族国家スリランカにおいて、シンハラ人が多数を占めるスリランカ政府とタミル人過激派との内戦が終わって平和が訪れた今こそ、最も大事なものは、再び内戦を起こさないために、シンハラ、タミル、ムスリム、キリスト教徒バーガーという諸民族集団の間の相互理解を進めることだと考えているからです。しかも、夫人の理念は、その相互理解は子供から、つまり子供のころに他の民族との交流を経験することが理解の出発点であるというものでした。この理念にもとづいて、彼女は、ONURというNGOを立ち上げ、それぞれの民族集団の子供たちが一堂に会してともに楽しむというイベントを大規模に実施しています。ONURとは“Office for National Unity and Reconciliation”（「国民統合と和解のための事務局」）の略で、HPは、<http://www.onur.gov.lk/index.php/en/>です。

このように、私たちは親善旅行を通して、はからずも国民和解というスリランカの新しい時代の到来を予感することができました。和解は、日本人の和の精神と深く関連すると思います。親日の国であるスリランカに和の精神が根付くように私たちも協力し、見守りたいという思いを強く実感した出会いとなりました。

では、夫人はどうして私たちの活動を知ったのでしょうか。実は、夫人はミドルネームが示すように、バンダラナイケ一族の娘さんであり、バンダラナイケはインドラナンダさんのお寺の檀家であるだけでなく、お寺と特別な関係を持っています。彼女の父親、ミスター・バンダラナイケはインドラナンダさんのお寺で仏教の勉強をし、イギリス国教会のキリスト教徒をやめて、仏教徒になったのです。こうした縁でチャンドリカ夫人がインドラナンダさんのお寺を訪問した際に、和尚が私たちの活動を紹介してくれたというわけです。

※上記のワークショップもまた『公益財団法人公益推進協会夢屋基金』からの助成金で実施することができました。



中央左側がインドラナンダ和尚、右がチャンドゥリカ夫人です。大邸宅の前庭にて。

生徒に語りかけるインド・タミルの先輩
2016年4月1日スバ・ランカ日本語研修センターにて